

5. 認知機能向上を目指して ～お買い物編～

介護老人保健施設 桑の実

介護福祉士 西部真哉（にしべ なおや）

共同発表者 藤本信広

＜はじめに＞日常のレクリエーションで脳トレなどを行う時は、大勢の利用者が参加し、皆様で答えを出し合っている。すぐに答えられる方も居れば、少し時間がかかる方もおられ、後者の方々へのアプローチを試みた。

＜目的＞・暗記と計算を取り入れて、個人個人の認知機能へ働きかける。

- ・買物をするような設定にする。思い出しやすい方法にする。
- ・利用者と接する時間を設け、どのような変化があるか観察する。

＜対象者＞

A氏：要介護4 年齢88歳 取り組み前の長谷川式13点

入所されてから3カ月、自身からの発語は少なく、表情も少し固い。

B氏：要介護2 年齢97歳 取り組み前の長谷川式12点

難聴であり、大きな声で声かけし、コミュニケーションボードを使った筆談を行う。

＜方法＞ 期間：令和4年1月15日～2月17日

① 紙粘土で作った野菜を並べる。②カードに書かれた野菜の名前を暗記してもらう。

③ 暗記した野菜を選んでもらう。④値札を見て支払いをしてもらう。⑤野菜の暗記と計算が合えば、2個、3個と選ぶ数を増やしていく。⑥暗記と計算が出来るまで繰り返し行い、それを記録する。

＜結果＞

取り組みを終えて、HDS-Rに関してはほぼ変わらなかった。今までとは違ったレクリエーションの方法であった為、最初は少し混乱がみられた。前は出来たが今回は出来ない、暗記は出来るが計算が出来ない、またはその逆の傾向もあった。しかし、反復して行うことにより、取り組み内での暗記力、計算力がついてきた。最初は2個しか出来なかった暗記、計算が4個まで伸びた。そして、利用者にも少し変化もみられた。

A氏：それまでしなかった車椅子を自走するようになり、職員と関わる時間が増え、会話する機会が多くなった。徐々に表情も柔らかく感じるようになった。

B氏：職員と一緒に、おしぼり巻きやエプロンたたみなど一生懸命打ち込む姿がみられ、周りの方々へ気遣いする性格だともわかる。また、レクリエーションへの参加も積極的になった。

＜考察＞

利用者に対し日常生活動作の介助に目がいきがちな時もあり、このコロナ禍でレクリエーションの形が変化した。定期的に関っていたボランティアの方との交流も無く、利用者にとって日常生活面で刺激となるようなものが少ない中、今回の取り組みを通し、個別のアプローチをすることで、普段あまり答える事が少なかった利用者の認知機能の把握や、どのような性格なのか向き合う時間がもてた。又、認知機能を引き出し支援する方法を考える機会になった。

＜まとめ＞

この取り組みを通して、利用者の脳の活性化と、生活環境の向上に繋がるよう、支援していきたいと思う。